

一万円の使い道

学校法人興南学園興南中学校 1年 又吉 詠子

今年の夏、夏休みに入る前に父と寄付やクラウドファンディングについて話し合いました。中学校入学祝いでもらったお金のうち、一万円をどこかの団体に寄付しようと父が提案してきたのです。

その時、私は、正直、自分のお金は自分で使いたいと思いました。私は、好きな本やマンガを買いたいと思っていました。

でも、父に提案されたので、興味は無かったけど調べてみました。するとさまざまな団体があり、いろいろな活動について知ることができました。

例えば、ある団体では、一万円寄付するとネパールで手押しポンプ一基を設置することができます。五千円では、マラウイで家庭用トイレ二基を設置できます。毎月二千円を寄付すると、約十人の人々が清潔な水を飲めるようになります。清潔な水が飲めなくて、汚れた水を飲み、病気にかかって亡くなる人もいます。だから、清潔な環境が整っていると、命を救うことになるということがわかりました。

私は、今まで、清潔な環境があたりまえでした。でも、これはあたりまえではなく、清潔な水が飲めない人々が世界にはたくさんいると分かりました。

また、ある団体では、月額三千円から一人の子どものお母さんになれるそうです。お母さんとは、遠い国の貧困で苦しんでいる女の子の生活援助をする人のことです。

なぜ、特に女の子を援助するのかというと、女の子は家事を任せられ十分に学校に通えません。だから、文字が読めなくて仕事に就けず収入がありません。暴力を受けたり、人身売買に巻き込まれたりすることも多いそうです。

私が持っている一万円で三人の女の子を援助できます。援助する事で、学校に通えたり、十分なご飯を食べたり、夢をかなえたりすることができるかもしれません。

今の私たちは、あたりまえに学校に行き勉強することができます。生活に困った時は支援してくれる法律もあります。考えていくうちに、日本は命が保証されている国なんだと思いました。

今年の夏、「一万円の使い道」を考える事で、日本と途上国の違いや一万円の価値について考える事ができました。そして、貧困で困っている女の子の援助として寄付することに決めました。何気なく使っていたお金の使い道も見直そうと思いました。

途上国は遠い国で、私が援助できるとは思っていませんでした。でも、インターネットでいろいろな事を調べたり、実際に援助したりすることができる事がわかりました。

これからも、身近な問題として考えていきたいです。